

大 県 南 遺 跡

—市道大県6号線建設に伴う—

1984年4月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市の平野・大県・大平寺・安堂一帯の東山地域は古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての時期に河内の中核部であったことから、古墳、寺院跡、官衙跡、集落跡等多数の重要な遺跡が存在する。

前回の調査の結果、鎌倉～室町時代に埋没した開析谷が明らかになり、多量の遺物が出土した。また、調査区周辺に中世集落址が存在していたと考えられる。今回の調査は、こうした予測を証明するものであった。

道路建設が周辺地域に与える影響は大なるものがあり、今後、東山をどう利用するかという問題も含め、地域開発と埋蔵文化財の保存、活用をどう一体化していくかが課題となろう。

また大県6号線の調査については、関係者並び地元の方々に御協力いただいた。これを機会により一層文化財保護への御理解と御協力を得たいと考えている。

昭和59年4月

柏原市教育委員会

例　　言

- 本書は柏原市教育委員会が市建設部土木課の依頼を受け、昭和58年度に実施した市道大県6号線建設に伴う第四次緊急発掘調査の概要である。
- 発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課 桑野一章を担当者とし、昭和58年11月18日～12月12日の期間行なった。
- 実測図中の方位は磁北、標高はT・Pである。
- 今回の発掘調査、遺物整理について、下記の諸氏の協力を得た。記して謝意を表する。

北野 重 花田勝広 安村俊史 広岡 勉
麻 采三郎 朝田行雄 井上岩次郎 奥野 清 川端長三郎 谷口鉄治
玉野正一 西岡武重 分才春信 道旗恭蔵 森口喜信 山田貞一
山本芳一 秋田大介 石田成年 井宮好彦 上条裕典 佐藤 尚
山中 茂 大塚淳子 松田光代 藤岡弘子 及一敏恵 松成早苗
(敬称略)

目　　次

は　し　が　き 例　　言

は　じ　め　に	1
第一章　調査に至る経過	1
第二章　調査の経過	3
第三章　解説、遺構	5
第四章　遺 物	16
第五章　ま　と　め	20

はじめに

本報告は柏原市教育委員会が昭和58年度に実施した市道大県 6 号線建設に伴う事前緊急発掘調査の概要である。本年度の調査は市建設部土木課との協議の結果、当初 4,646,000 円の予算を計上して開始し、年度内の事業として概要報告書の作製を行なう予定であった。ところが実際の調査は、土地の買上げが計画通りに進まなかったために少ない面積になり、計画した予算枠を下回るものであったものの、財政引締め等の影響で印刷、製本費がカットされ、報告書の作製が困難なものになってしまった。

しかし、後述するように今回の調査結果からは思いもしなかったような場所から貴重な遺構が発見され、生駒西麓に展開した「河内六寺」の歴史を理解するために重要な手掛りを与えるものであったために、調査成果の報告の必要性が痛感されるものであった。また「広報 かしわら」でも報じたように、わたしたちの生活と埋蔵文化財との関わりを知るうえでも貴重な調査だったのである。そこで教育委員会では昭和59年度の文化財に関する事業の一つとして予算を計上し、本概要報告書を刊行することになった。

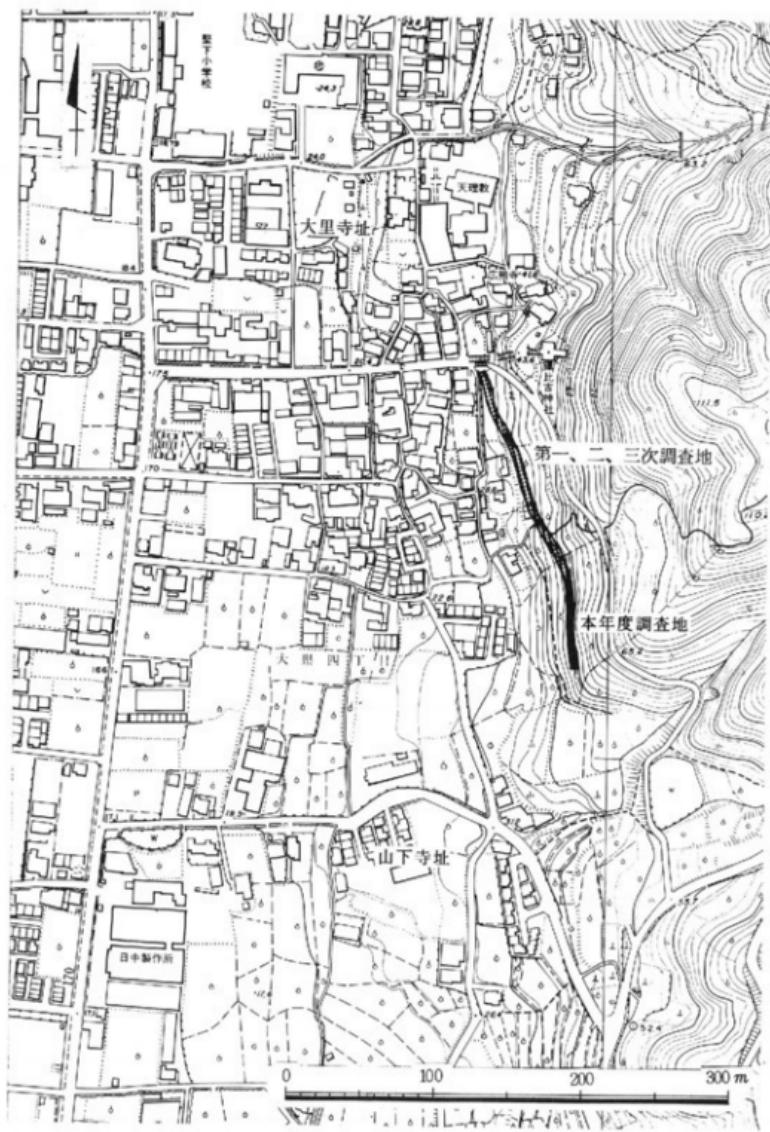
なお調査期間中には帝塚山考古学研究所 堅田直所長、八尾市教育委員会 山本 昭氏、奈良大学 水野正好教授の諸先生を始め、市建設部土木課 田中清一郎氏及び土地所有者の方々からは貴重な御助言、御配慮を賜わりました。記して感謝の意を表します。

第一章 調査に至る経過

市道大県 6 号線の建設は市建設部土木課によって計画され、輝北古神社参道の石段下から南に延び、皿池農道に接続する幅員 4 m、延長約 300 m の道路で、昭和55年度を初年度とする 7 ケ年にわたる継続事業であり、発掘調査も各年度の工事に先立って順次継続的に行なうものである。

調査に至る経過については『大県遺跡－市道大県 6 号線建設に伴う－』（1983）に詳しいが、本年度は過去三次の調査を受けて第四次調査にあたり、今回の調査地から南については大県南遺跡に相当する（図-1）。

第一、第二、第三次調査の結果からは、旧地形が復元されて 3ヶ所の埋没した開析谷が存在することが明らかになった。この開析谷から中世の遺物が数多く出土するところから、尾根上に当該期の住居址が存在することが推定され、他にも 5 世紀から 7 世紀にかけての祭祀遺物が認められるところから、古墳や墓址群の存在が推定されるところとなっている。本年度の調査地も地形的にみれば東に高い急斜面という相似した環境にあり、同じような時期の遺構や遺物が存在することは当然予想された。従って建設予定地に対して可能な限り広い面積を調査する必要性が認められたのである。



図一1 調査地位置図

第二章 調査の経過

調査区は図-2のように北から順にA～Gまで8ヶ所を設定した。調査区を設定するに際しての最大の問題は土置場をいかに確保するかという点にあった。というのは東側は道路建設予定地いっぱいでブドウ棚が作られており、西側はコンクリートの擁壁が組まれた崖になっていてどうしても調査地内で土を処理しなければならない。また機械力を動員することも見込め

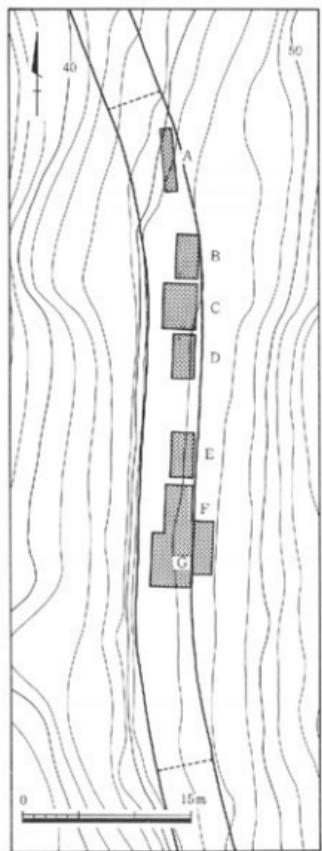


図-2 調査区位置図



調査前の状況



調査開始



調査の状況

ない狭小な場所であるために、土の移動にしても人力で行なわざるをえないという状況であった。調査予定日数との関係や土砂の流出などの危険も考慮して全面調査を行なうことは無理であると判断し、コンクリート擁壁を壊さないように離れた位置に図のような調査区の設定となった。各調査区は基本的には $1.5\text{m} \times 3.5\text{m}$ の大きさで設定したが、遺構等の検出に伴い、随時拡張した。なお始めの計画では図に示すように道路建設予定地内に破線で示した部分が本年度の工事予定地であったが、土地買収の予算がつかず調査後実際に工事が施行された範囲はG調査区以北となっている。

調査は西側に土砂の流出を防ぐためのコンクリートパネルを立て、2ヶ所の調査区の掘削を併行して行なった。A区を除いては地山面に達するまでの深度が斜面上部にあたる東側で約2m程もあり、排土の量も相当なものになった。遺構が検出されたのはC区、G区である。

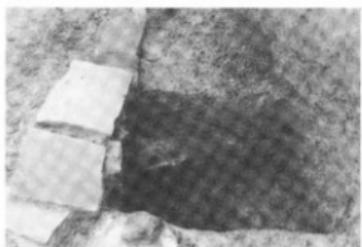
C区では地山面で四角い柱穴掘り方と円形の小ピット、7世紀から8世紀代の平瓦がまとまって検出され、西側に拡張した。拡張部分はコンクリートの敷かれた現在も使われている里道の下にあたり、ほとんどが道の造成の際の擾乱土で地山面でピットの存在を確認した。また円形の小ピットは中に腐食した鉄線を巻く石をもつものがあり、おそらく埋め殺されたブドウ棚のアンカーであろう。遺構としての意味はないが、削平や盛土を行なって斜面地を有効に利用した人間の足跡をたどる現代資料として興味あるものであった。



1. 瓦が始めた(G区)



2. 瓦の並びが確認された(G区)



3. 瓦が重なっていることが確認された(G区)



4. 全体があらわれた(G区)

G区では表土下1m程で7世紀代の高杯、杯、皿、小型短頸壺などがまとめて出土し、始め祭場などの存在を考えたが、地層の観察や下位から中世の土師小皿が出土したため攪乱であろうと判断し掘削を続けたところ、地山面から掘り込まれた柱穴掘り方や地山の傾斜に沿って並べられた瓦積みの遺構が検出された（写真）。そこで可能な範囲で調査区を拡張したところ、掘立柱建物の柱穴であろうと思われる円形のピットの並びや平坦な地山面の存在が明らかになった。

各調査区の埋め戻しは土置場を確保するために順次行なっていったが、最後に全体をならして旧状に戻し調査を終了した。調査終了後G区で検出された瓦積みの遺構について保存を計るため、市建設部土木課との協議に入った。

第三章 層序、遺構

A区（図-3）

A区は6m×1mの範囲を設定し掘削を行なった。現地形は南、東に高いものであるが、掘削の結果地山面の傾斜は正反対で北、西に高いものであった。各層から現代の陶磁器が出土し、遺物包含層はない。地山面までの深さは北側で20cm、南側で50cmである。

B・C・D区（図-4、5）

B、C、D区は隣接する調査区で、実際には併行して調査されたものではないが、層序や遺構など関連させて把握する必要がある。

B区では深さ約1mで花崗岩の地山面に達した。この間に遺構面は存在しなかったが、7、8世紀代と思われる須恵器、土師高杯、半瓦等の破片が6層に包含されていた。地山面には調査区東南部に若干の高まりがあり、この高まりを分断するように地山面から掘り込まれた東から西に向けて傾斜する溝が検出された。溝の埋土からは鉄滓、土師羽釜、壺、6世紀終末の特徴を示すたちあがりの極端に低い須恵杯身などの破片が出土した。なお東壁の土層から観察さ

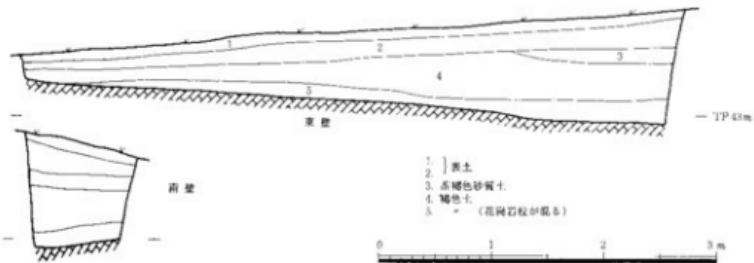
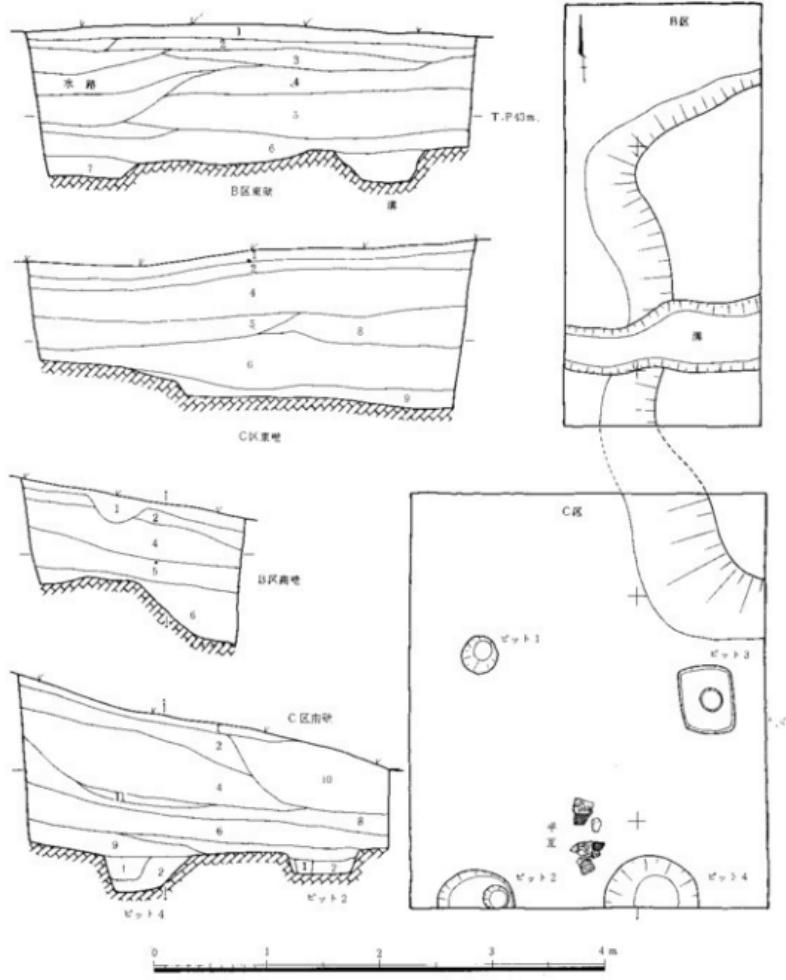


図-3 A区の層序



- | | | | | |
|-------------|---------------|-----------------|-------|-------|
| 1. 表土 | 7. 茶色砂質土 | (ビット 1) | (植) | 茶色砂質土 |
| 2. 黄色砂質土 | 8. 黄褐色土 | 1. 灰黑色沙土上 | | |
| 3. 黑色砂質土 | 9. 黄褐色土(炭を含む) | 2. 灰色上(花崗岩粉が多い) | | |
| 4. 灰黑色砂質土 | 10. 甲殻の整地 | (ビット 2) | | |
| 5. - (礁が多い) | 11. 黄色砂質土 | 1. 黄色砂質土 | | |
| 6. 黑色砂質土 | 12. 黄色砂質土 | 2. 灰色土 | | |

図-4 B・C区の層序と遺構

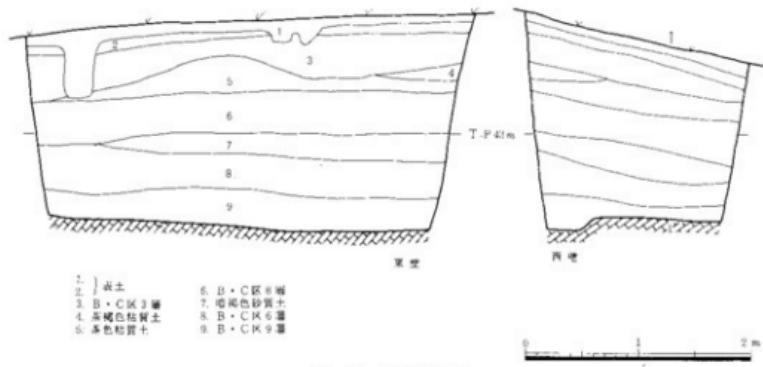


図-5 D区の層序

れるように、調査区北側に灰色の砂質土と粘質土が互層に堆積する落ち込みが認められたが、この落ち込みは表土近くから切り込まれていたため、おそらく現在のブドウ畑に関係する水路の痕跡ではないかと思われた。

C区では深さ約1.5mで花崗岩の地山に達した。B区同様に地山面までの間に遺構面は認められなかったが、6層、9層から7、8世紀代の須恵杯身、甕、壺脚台部、土師杯、甕、平瓦などの破片が出土した。地山面はほぼ平坦であるが調査区北東部に高まりが認められた。これはB区の高まりから連続するものであろう。遺構としてはピット1～4が検出された。このうちピット2、3は四角い掘り方をもち円形の柱穴が認められたものである。2の掘り方は一辺約70cm、深さ20cm、掘り方埋土の上面で東に偏した径20cmの柱穴が存在した。3の掘り方は長辺60cm、短辺48cmの長方形で深さ3cm、掘り方底面に径20cm、深さ2cmの柱穴が存在した。4についても土層の断面観察からは柱穴様の痕跡を認めたが、平面的にははっきりと識別できなかった。おそらくピット2、3は柱の規模からすれば同じ建物の柱穴であろう。とすれば両者に対応するような柱穴が調査区内に少なくとも2つは存在するはずである。これについては現存するピット3の掘り方が極めて浅く上部を削平されている可能性もあり、すでに失なわれてしまった可能性もあるだろう。なお地山にへばりつくように平瓦の破片が出土している。

D区では深さ約2mで花崗岩の地山に達した。3層から7、8世紀代の須恵甕、土師高杯、杯、甕、平瓦、丸瓦、中世の土師小皿などの破片が出土した。6層には7、8世紀の土師高杯、甕、小型手捏高杯の破片が含まれていた。9層にはやはり7、8世紀代の土師器杯、平瓦の破片が認められた。9層の平瓦は第四節で紹介するように完形に近いものが多く、東壁の清掃中に9層中というよりもむしろ地山に接して、あるいは地山に近い位置から出土したものである。南壁の断面観察からもわかるように地山面調査区東側で幾分落ち込んでいるという状況

もあり、平瓦が地山面に接して調査区東側を特定して出土していることは、調査区をはずれた東側に相当数の瓦などが存在する可能性を示唆しており、また半瓦を多量に含むような遺構の存在を推定することができるかもしれない。

B、C、D区ではA区から引き続いて地山面の示す旧地形は、南にいくに従って次第に低くなる緩斜面になっている。そして中層には7、8世紀から中世の遺物を含む包含層が、下層には7、8世紀代の土器や屋瓦を含む包含層が存在し、地山面には遺構の痕跡が残るという状況にある。

E・F・G区（図-6、7、8）

ここでは同じ遺構の広がりとして捉えられるF、G区の成果を始めに報告し、次にE区について紹介する。F、G区は当初個々に掘削、調査を行なっていたが、遺構が検出された時点でその広がりを把握するために一つのものとし、また可能な範囲で拡張したものである。

遺物は小破片ばかりであるが、他の調査区と比較すると遺物量は圧倒的に多い。また上層も色調によって細かく区分される。層序と出土遺物の関係を簡単にまとめると

3層：土師羽釜他、平瓦、鉄釘等の破片

4層：須恵器、土師器、小型手捏高杯等の破片

5層：須恵蓋杯、甕他、土師高杯他、平瓦等の破片

6層：7世紀代の土師高杯、杯、皿、甕他で完形になるもの。第二節で紹介したように「祭場」ではないかと一時考えたもの。

8層：須恵器、土師器、土師小皿等の小破片

9層：A、B層とともに6世紀末から7世紀代の須恵杯蓋、甕他、土師高杯、甕、羽釜、甕他、瓦器塊、土師小皿等の破片、鉄滓

10A層：土師高杯他、土師小皿等の破片、鉄釘、鉄製刀子、刀子はピットIの西側で地山面「第一段」から土師小皿とともに出土したもの。

11層：7世紀、8世紀代と思われる須恵器、土師器等の破片

14層：6世紀から7、8世紀の須恵杯蓋、甕他、土師高杯、杯、甕、羽釜、甕他、平瓦等の破片、鉄滓。

16層：7、8世紀代の須恵器、土師器等の破片、土師小皿。

17層：須恵器、土師器等の小片を含むが出土量は極めて少ない。

というようになり、上層から下層までまんべんなく出土し、しかも上層から中層にかけては7世紀から中世にかけての遺物が同一層に混在していたことがわかる。一方11層、14層、17層など下層の遺物包含層は6世紀末から7、8世紀代の遺物を包含するものであった。

次に遺構と層序との関係をみてみると、まず注意されるのは9A、B層、10A層、11層、17層等がほぼ調査区全体にわたって水平面をもつように堆積していることである。これによって

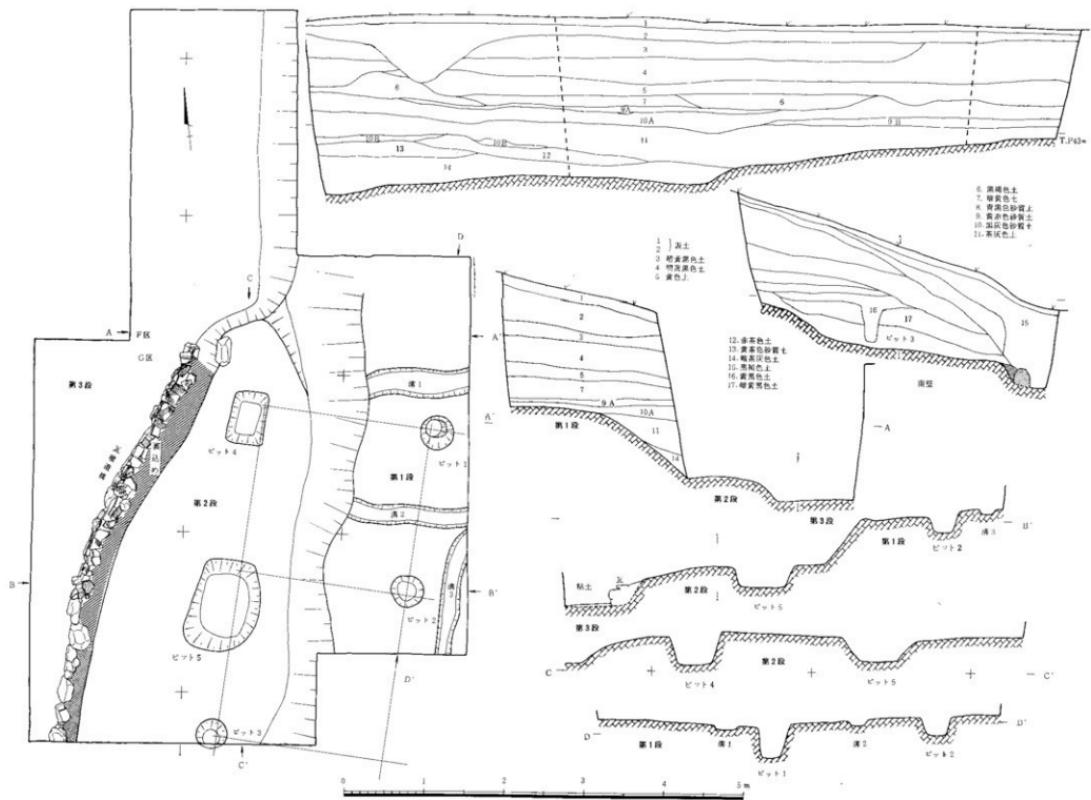
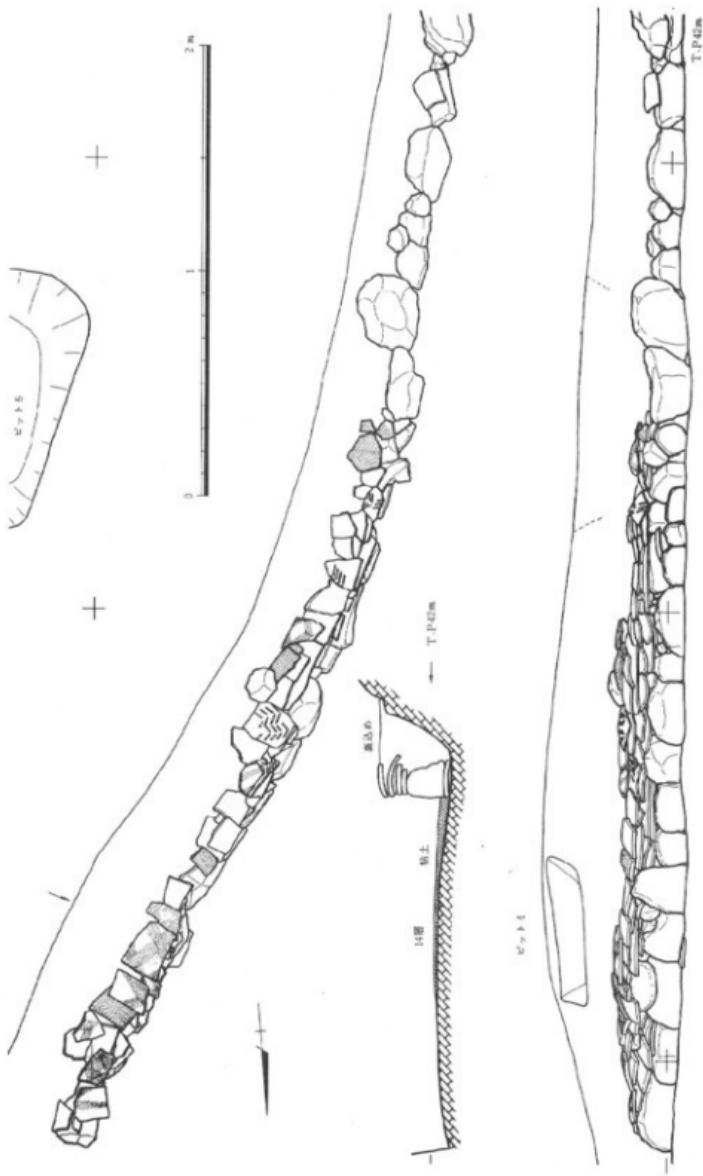


図-6 F・G区の層序と構造

图—7 瓦砾堆积



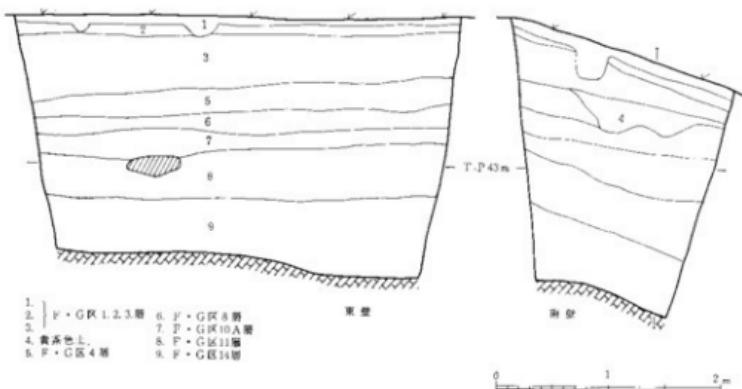
調査区中央部から西側にかけて低く傾斜している地山面が埋め立てられるようにして、調査区東側の地山の「第一段」がもつ平坦面が確保、拡張されて広い平坦面がつくられ、その上に土砂が順次堆積した様子を窺うことができよう。この平坦面にはピット1、2、3、溝1、2、3がみられ、一つの造構面をなすものである。ピット1～3は径40cm程の円形ピット、しかも等間隔に並んでおり掘立柱建物の存在が推定される。図示した以外にはピットを検出することができなかつたので、はたしてどのような規模の建物であるかは明らかではないが、それ程しっかりした掘り方ではないので、大きな建物ではなかろう。また溝は幅30cm程で浅く、その機能も明確にはしれないが、柱穴と考えられるピットを囲むように配されており、建物に伴う水抜きの施設であるかもしれない。以上にみるとこの建物遺構は斜面地にある時期、6世紀末から8世紀代の遺物を含む土砂を盛土して建てられたものであり、廃絶後ピット3の埋土が16層であることからわかるように、大きな時を経ずして7、8世紀から中世の遺物を包含する土砂が一定期間水平に堆積したものであろう。

次に遺物包含層11層の下位、地山面「第2段」にピット4、5が検出された。検出状況はいずれも地山面から掘り込まれたもので柱穴は確認されなかったが長方形を呈し、4は長辺70cm、短辺45cm、深さ42cm、5は長辺118cm、短辺95cm、深さ28cmを測る。5の埋土からは7世紀代の須恵杯身、土師高杯、甕などの破片が出土している。G区の拡張の結果、地山面第2段はF、G区の境界付近に北側限界をもつテラス状の平坦面であることが判明した。

さらにG区部分を中心にして遺物包含層11層、14層、現在の里道を造成した際の盛土層の下位、地山面第2段西側の傾斜面から地山面「第3段」にかかる部分に平瓦の並びが認められ、周囲を掘り下げたところ自然石を孤状に配した上に平瓦が積み上げられた瓦積造構が検出された。瓦積造構は南北に約5.2m並べられ、高さは35cmを測る。

瓦積造構の構築された状況をみると（図-7 断面図）、地山面第3段の東側、第2段の傾斜面と接する部分がわずかにくぼんでおり、ここに自然石を直接、あるいは平瓦を置いた上に自然石を置き並べ、その上に平瓦を4段～5段積みあげたものである。自然石の前面には一定の範囲に粘土が敷かれており、地山面第3段が平坦面をなすように造作されているとともに、自然石の下部は粘土によって保持され、動かないような役割をもつもののように思われる。また瓦積造構と地山の傾斜面との間には粘性のある土が充填されていて、これも自然石、瓦が動かないように保持するための裏込めとして作用していたものであろう。造構の南側は攪乱を受け自然石の上に瓦がみられないで明確にはいえないが、地山面第3段あるいは粘土面から出土した平瓦の量は少なく、したがって瓦積造構から転落した瓦の量はわずかで造構の高さも検出状況から大きく隔たらないものと思われる。また自然石は上部の積み上げられた平瓦を支えるための地覆石としての役割をはたすものであろう。

地覆石の石材には花崗岩が多用されていたが、他にチャート、石英片岩が用いられていた。



図一8 E区の層序

平瓦は上部にあるものを観察した限りでは、凹面に布目、凸面に各種の叩き痕をもつもので、7、8世紀代のものである。大きさは一枚の平瓦を四分割した程度のものがほとんどで、一部半截のものもある。この程度の大きさになると平瓦のもつ曲面は気にならず、ほぼ平坦で、從って積み重ね、並べる方向も一定しない。意図的に大きさの一定した平瓦を集めたものか、あるいは大きさを意識して割ったものを用いたのか問題となろうが、例えば色調についてみれば、茶灰色、黒灰色など様々なものが使用されており、その点では瓦積造構を構築した際に一定の美的、装飾的意識は働いていないようではある。

この瓦積造構はより北側のF区、さらには次のE区にまでは及んでいない。地山上の遺物包含層自体はこの地区でも14層が一様に堆積しており、また地山上にも平瓦の出土が認められなかったことからすれば、瓦積み造構の存在した範囲は地山面第2段の周辺に限定できよう。こうしてみると瓦積み造構と地山面第2段、ピット4、5とは一体の造構として把握することができよう。そして瓦積み造構の前面にみられた粘土面や造構下のくぼみなどについて注意すれば、G区東側やF区の地山面第3段もこうした造構と一体となるものとして捉えなければならないだろう。なおF区東側では地山は急激に高くなっている。

E区では深さ約2mで花崗岩の地山面に達した。遺物は3層で須恵蓋杯、甕等、土師杯、甕等の小片が、4層から須恵蓋杯、土師杯、羽釜、甕、瓦器塊、土師小皿などの破片が出土し、14層からわずかに土師器片、鉄滓などが認められた。この間にF+G区でみられたような掘立柱建物に関するような造構は認められなかつたが、8層はF+G区11層と同じものであり、一つの造構面として考えられよう。同じように地山面もF+G区から連続する造構面として捉えることができるが、ここでは西側に著しく下がっていた。

第四章 遺 物

各調査区、各層から遺物は出土しているが、いずれも小破片で復元し図示しうるものはほとんどない。ここではG区6層でまとめて出土し復元することのできた土師器、刀子、鉄釘、鉄鋸、瓦積遺構に用いられた瓦を含む平瓦、道具瓦について報告する。

G区6層出土の土師器(図-9)

1は小型の杯。全体を手捏整形した後底部外面をヘラ削り、口縁部から内面にかけて荒いナデ調整を施したもの。胎土には細砂粒をわずかに含む。2は中型の杯。やはり手捏整形した後口縁部外面に強い横ナデ、内面を軽くナデ調整したもの。内面には正放射状の暗文がみられる。

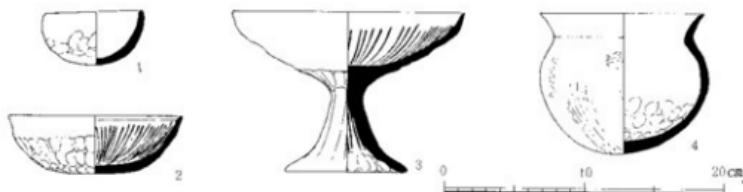


図-9 G区6層出土の土師器

胎土は密で角閃石を含む。3は高杯で杯部内面から外面は横ナデ調整、脚部との接合部は指ナデ、脚部はナデ調整が施されている。杯部内面には正放射状の暗文が、脚部内面には指頭圧痕、しづり目がみられる。杯部と脚部の接合部には粘土の継目が残る。胎土は密で角閃石を含む。4は小型の短頸壺で外面はハケ調整後ナデ調整が、内面なナデ調整が施され、内面底部には指頭圧痕が残る。胎土には長石をわずかに含む。いずれも焼成は良好で赤褐色を呈する。時期は7世紀前半代であろう。これらは復元して完形になったものであるが、他に数個体分の杯、高杯破片が出土しており、完形に近いかたちで数個体の杯等が含まれていたものである。

鉄製刀子(図-10)

G区10A層、地山面第1段ピット1の西側の位置から土師小皿とともに出土したもの。長さは25cmを測る大型品である。半造り、角棟、峰はフクラ付き。刃はやや内反りで占式の様相をとどめている。木製の柄が付き目釘が遺存する。木質部は柄だけでなく刀身にも残っていて、

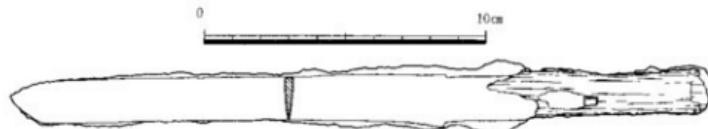


図-10 鉄製刀子

木製の鞘に収められているものかもしれない。図版に示したX線写真は帝塚山大学、堅田直教授に依頼して撮影していただいたものである。

鉄釘（図版）

鉄釘は3本出土している。いずれも破損品で全体の大きさはわからないが折曲頭鉄釘である。

鉄滓（図版）

11点出土しており総重量は350g。径5cm内外の板状のものである。1点はB区の溝から出土しているが他は包含層出土のものである。

平瓦（図-11、12）

平瓦はF・G区の瓦積遺構に使われたものをはじめ、C区、D区の地山上の包含層からまとまって出土している。いずれも破片のため具体的に法量を知ることはできないが、大きな破片からそのかたちをみると、厚く方形状のものと薄く台形状を呈するものとの二種類が存在する（図-11 1、2）。また特異な例として瓦積遺構転落瓦として考えられる一端に刺り込みを入れた平瓦が存在する（同3）。道具瓦ではないかとも思われるが、整形や凸面の縫合目、破損の位置などからすれば平瓦の一種とした方が良さそうである。側面はヘラ調整され凹面には布目が残る。長石を胎土に含み焼成良好、明灰色を呈する。刺り込みは焼成前、生乾きの段階でなされたもので、基本的には平瓦から変形されたものである。破片のため全体の形状は不明だが、両端に刺り込みを入れたものであろうか。近世の平瓦にはこうした刺り込みがみられるが、本例のように飛鳥、奈良時代の古瓦には類例のないものである。

さて平瓦は叩き目の種類によっても区分することができる。今回出土した資料では7種類に区分することができた（図-12）。

I類（3）は細い軸の格子叩き目。凹面には布目痕、2cm幅の横骨痕をとどめる。厚さが8mmと極端に薄く、黄茶色を呈する極めて焼成の悪いものである。船橋遺跡から類例が出土している。II類（4）は太い軸の格子叩き目。半瓦側縁に平行して叩かれている。凹面は斜方向に強くナデ調整が行なわれており、側面はヘラ切り未調整。胎土は長石を含み焼成は堅緻、灰色を呈する。III類（5）は太い軸の格子叩き目と斜格子叩き目の2種がみられるもの。凹面は布目痕が残るが斜方向にナデ調整されている。凹面の下端部はきつくな面取りされており側面はヘラ切り未調整。胎土は長石を含み焼成は堅緻、灰色を呈する。IV類（6）は有軸綾杉の叩き目。斜方向に叩く。凹面には布目、側縁近くに布巻目がみられる。幅3cm程の横骨痕を残す。側面はヘラ切り未調整。長石、雲母を胎土に含み焼成は堅緻、黒灰色を呈する。V類（7）は有軸綾杉の叩き目。IV類と異なるのは中心の軸の他に一方に偏した位置にも軸があり、副軸をもつともいべきものである。幅9cm、長さ12cm以上の原体を斜方向に叩く。凹面には布目、幅2cm程度の横骨痕を残す。胎土には長石、雲母を含み焼成は堅緻、黒灰色を呈する。VI類の叩き目は（8）のように平瓦下半部にのみみられるもので、また（1）のように側縁部にかかるよ

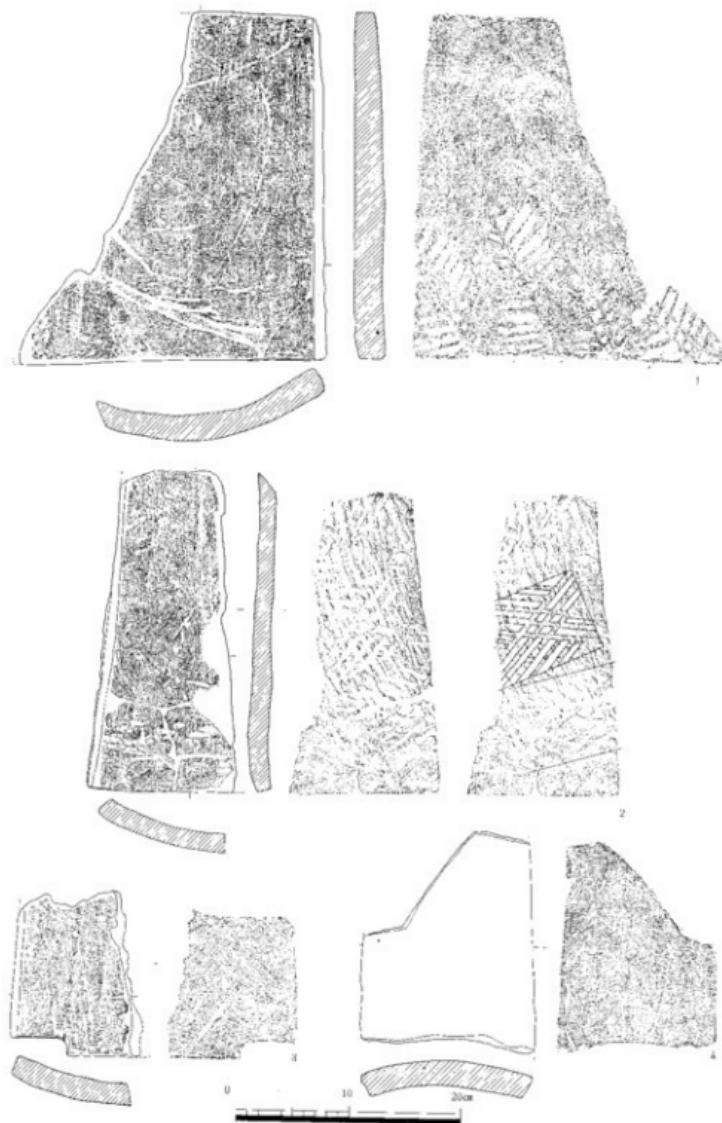


图-11 平瓦、道具瓦(4) 实测图

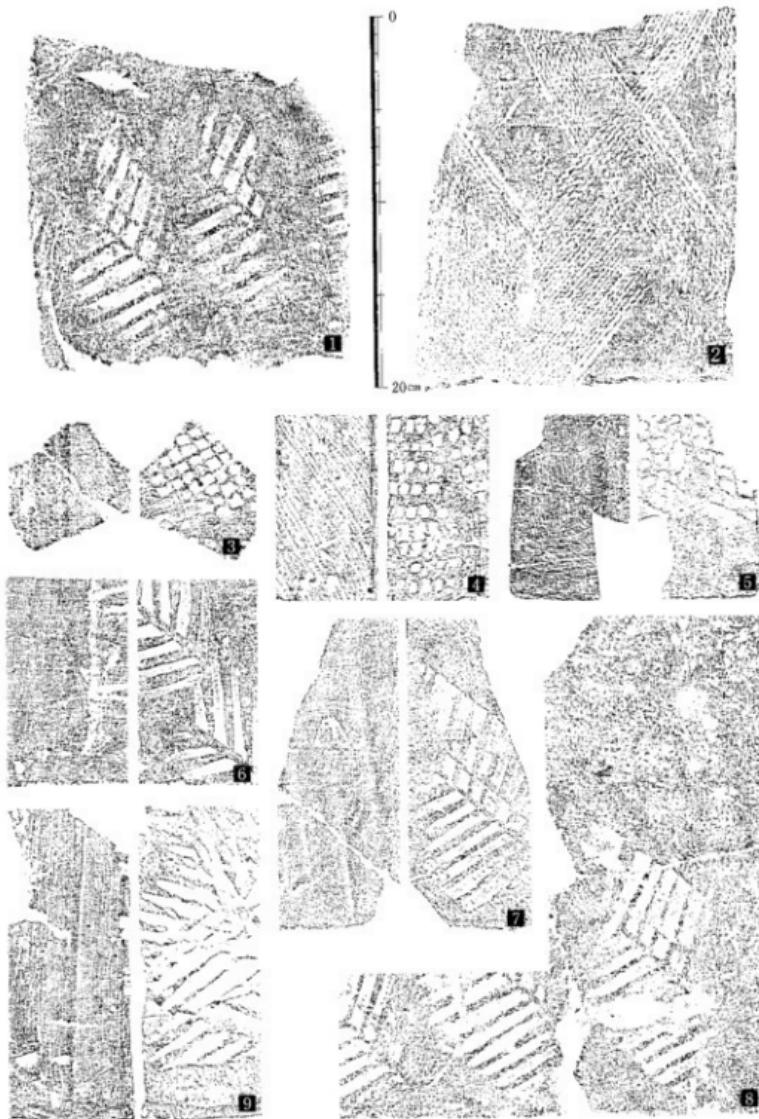


図-12 平瓦叩き目拓影

うにも叩かれている。VI類(9)は一見複雑に入り乱れた条線の叩き目。ところが図-11の(2)の平瓦から斜格子部を中心に多方向に幅6mmの条線が刻まれた幅7.5cm、長さ10cm以上の原体が復元された。条線が複雑に入り乱れてみえるのは、叩きの後強くナデ調整が行なわれているからである。このナデに使用された工具はナデ調整痕が丸くぼみ明瞭な稜をもつことから、丸棒状の工具とみることができる。これを单一に、あるいは束ねて使用したものであろう。凹面は布目、幅3cm程の模骨痕が残り、側面はヘラ切り未調整。下端部は凹凸両面ともきつい面取りがみられる。胎土には長石を含み焼成は堅密、茶灰色を呈する。VII類(2)は繩叩き目。幅8cmの原体をジグザグに叩く。縦方向の繩の痕跡がわずかに残っており、縦の叩き→ナデ調整→ジグザグの叩きの順に平瓦凸面の調整が行なわれたものであろう。凹面は布目、側面はヘラ調整、淡灰色を呈する。本例と(1)の拓影は発掘調査時に瓦積遺構から採取したもので、瓦の観察については十分ではない。

平瓦凹面や側面の観察からするとI～VI類は桶巻作り、VII類は一枚作りと考えられる。また先述した平瓦のかたちと叩き目の種類の関係をみると、かたちは不明だが極端に薄いもの—I類、方形で厚いもの—IV類、V類、VII類、台形で薄いもの—IⅢ類、V類、VI類のようにまとめることができる。この関係を整理すると、今回出土した資料の範囲では、桶巻作りの平瓦には極端に薄いものや方形、台形のものがあり、I類～VI類の叩き目がみられるのに対し、一枚作りの平瓦には方形、VII類の叩き目が限定してみられる。出土状況はVII類のような繩叩き目の平瓦が瓦積遺構に多用され、VI類の多方向条線の叩き目を残す平瓦がD区、I類～III類の格子叩き目の平瓦がC区から多く出土した。

I類～IV類、VII類は市内各地の寺院址に類例がみられる。一方V、VI類は市教育委員会 花田勝広氏の指摘によると、調査区を南西に降った位置にあたる山下寺推定地内の調査時に出土した平瓦に類例がみられるとのことである。

道具瓦（図-24 4）

熨斗瓦の破片で幅15cm。凹面は布目がみられる。側面の一部にヘラ切り未調整の痕跡をのこすところから、平瓦を分割して作られたものであろう。胎土に長石を含み色調は淡灰色を呈する。瓦積遺構の前面から出土したもので、転落瓦であろうか。

第五章 まとめ

最後に調査成果の簡単なまとめと、調査後市土木課との協議の結果行なわれた遺構の保存措置について報告しておくことにする。

「調査に到る経過」の項でも触れたように、過去3回の調査によって鐸比古神社から皿池に到る急峻な斜面地においても、古墳や中世の住居址などの存在が推定されていたが、今回の調

査ではこの推定を具体的に裏付ける遺構が出土し、古代から現代までの斜面地の積極的な土地利用の営みを知ることができた。確認された2つの遺構面は、6世紀末～8世紀、中世の遺物を含む厚さ2mに及ぶ土砂によって埋め立てられ、ついにはブドウ畠として利用されたもので、現在の地形からは過去の状況を全く知ることはできない。山腹の土地利用という視点でみれば調査の成果からは3段階を設定することができる。

最も古い利用例は6世紀末～8世紀の遺物を含む包含層の下から検出された瓦積遺構である。この遺構はかたちの上からみると建物基壇としての機能を考えることができるかもしれない。しかし瓦積基壇とすると多くの点で問題が残る。瓦積基壇の構造は通常縦に半蔵した平

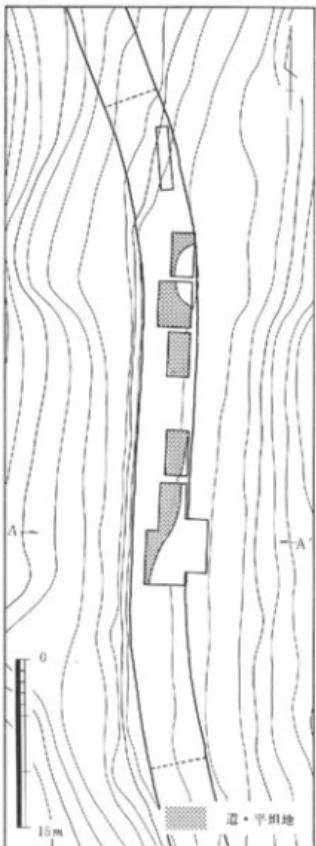


図-13 道状遺構

瓦を、側縁部を基壇前面に揃えて積み上げたものである。平面形は方形ないしは長方形の一辺として当然直線的であり、仮に八角円堂の基壇のようなものとして考えても角が存在するはずであろう。しかもある程度の高さが必要とされる。また『片山廃寺塔跡発掘調査概報』によれば、平瓦の色調も整えられていて外観上の美観も意識されていたことが報告されている（柏原市教育委員会 1983）。こうした点からすれば今回の瓦積遺構は建物の基壇としては考えにくい。

ところでこの瓦積遺構は第3章で報告したように北に向って延びる地山平坦面第3段とテラス状の第2段と一体をなすものであり、第2段に付属するとと思われる施設である。この地山面第2段にはかなり大きな長方形のピットが穿たれており、これが方向性をもって並んでいることからすれば、ここでは柱穴として理解しておきたい。ただし地山面第2段の広さからすると、このピットがより南側に直線的に並ぶものではあっても、建物を想定させうるようなものでないことは明らかであろう。おそらく柱が直線的に並ぶことからすれば、塀や檻のようなものが南側に延びていたものと思われる。従って瓦積遺構もこうした機能をもつ遺構の延石的な、あるいは土留めの化性的な役割をになっていたものではないだろうか。この瓦積遺構の前面にある平坦面はすぐ西

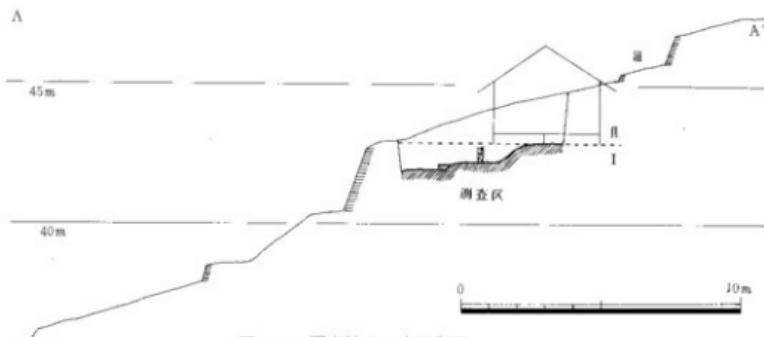


図-14 調査地内の土地利用

側が急峻な斜面地となり、平坦面の幅は狭いため山腹にとり付けられた道であり、さらに北側のB、C区にも続いて一部には平坦面が広くなり建物も建てられていたと考えたい。D区の平瓦出土状態は、この道に沿って調査区を外れた東側の位置にも再び瓦積遺構が存在することを示唆している。この遺構面をⅠ期とする（図-13、14）。

次にⅠ期の遺構面を埋め立てるようにして平坦面をつくり、山腹にとり付くようにして掘立柱建物が建てられていた時期がある（図-14）。この遺構面はE、F、G区など調査区南側に存在した。建物の規模は明らかでないが、地形を考えれば東側のブドウ畑の下に広がる可能性はある。建物の廃絶後すぐに7、8世紀から中世の遺物を含む包含層が遺構面に水平に堆積していく。

Ⅲ期はいうまでもなく現在のブドウ畑である。ブドウ畑の造成の際には、やはり7、8世紀から中世の遺物を含む土砂を利用しておらず、これらは現行の地形に沿って堆積している（図-14）。

Ⅰ期、Ⅱ期の時期は瓦積遺構に使われた平瓦の年代や包含層に含まれる遺物の時期により、それぞれ奈良・平安時代、中世以降と考えられるが、それ以上の細かい時期は断定しにくい。というのは土の堆積はほとんどが自然堆積層ではなく、人為的な盛土層と考えられるためである。こうした土砂はどこから運び込まれたものであろうか。包含層中に含まれている遺物には高杯や鉄釘、鉄製刀子、小型手捏高杯など古墳に関わる遺物が含まれており、一つにはこうした古墳などを破壊して土砂が運び込まれたとすることができる。さらに羽釜や甌など生活用具類も多く住居の存在が推定される。古墳時代から奈良、平安時代にかけての集落は、山麓の扇状地や東高野街道沿いに展開していて調査区からは離れた位置にあるので、ここで推定される住居の性格が問題となろう。今回出土した平瓦の叩き目の検討によって、先に山下寺との関係を把握することができた事実からすると、調査区の斜面下に推定されている山下寺の僧房的な

ものをこの住居に比定することができるかもしれない。瓦積造構の平瓦も山下寺の盛行期・奈良時代のものであり、山腹にとり付けられた道も盛行時・山下寺の寺域の広がりを示すものではないかと思われる。すると先に述べたようにⅠ期の時期の推定には層序に関する基本的な問題点があるが、もう少し限定して奈良時代に特定することができるものかもしれない。Ⅱ期の造構面にみられた掘立柱建物は、山下寺の衰退後こうした僧房や道を漬すようにして建てられたものだろう。

調査終了後、瓦積造構について市建設部土木課と協議したところ以下の報告を受け上面に砂を入れて保存が計られることになった。また次年度の調査についても当然瓦積造構が存在することが予測され、これについても調査後保存することが約束された。

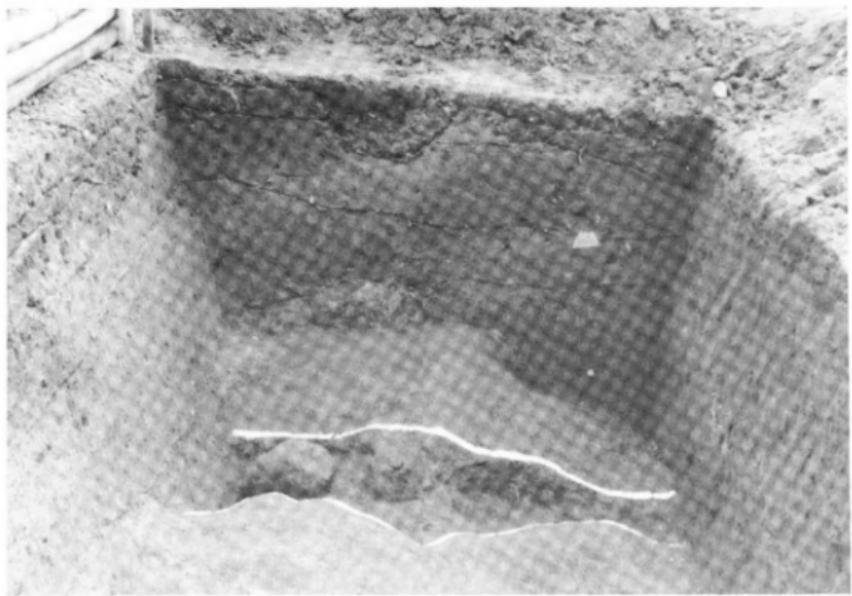




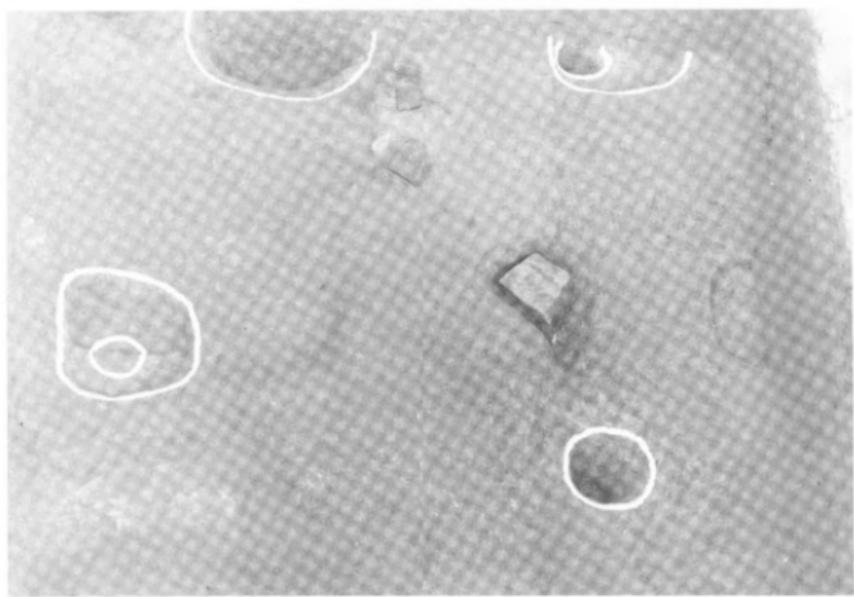
調査地遠景（西から）



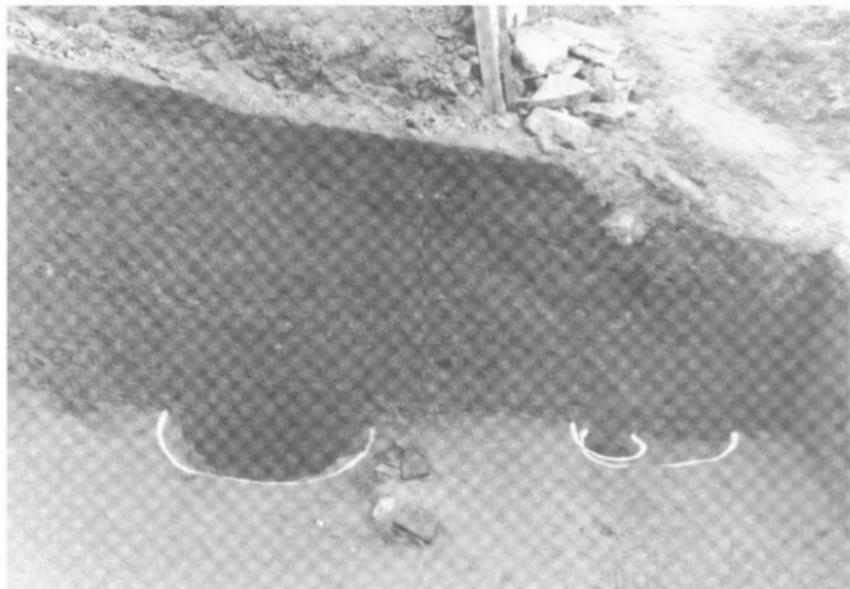
調査前の状況（南から）



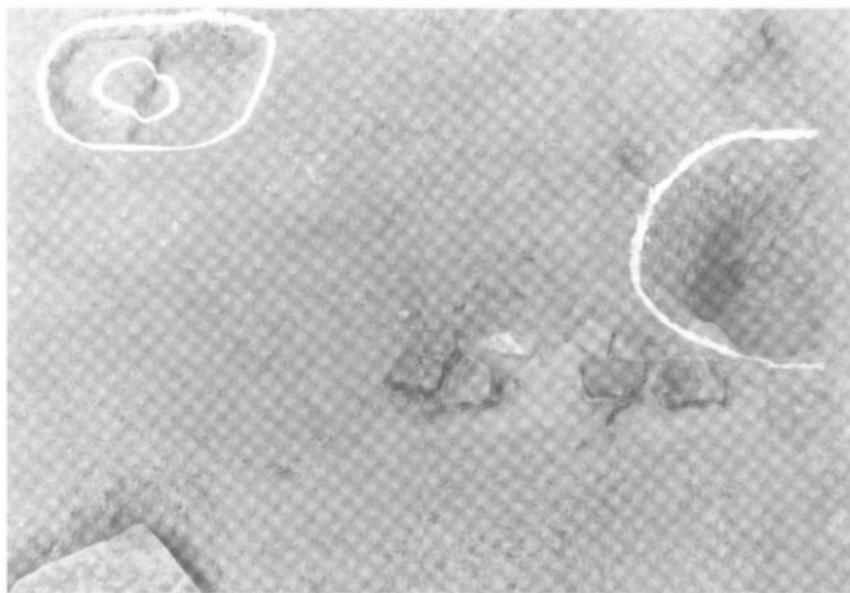
B区の溝（北から）



C区のピットと平瓦（北から）



C区の層序（南壁）



C区の平瓦（西から）



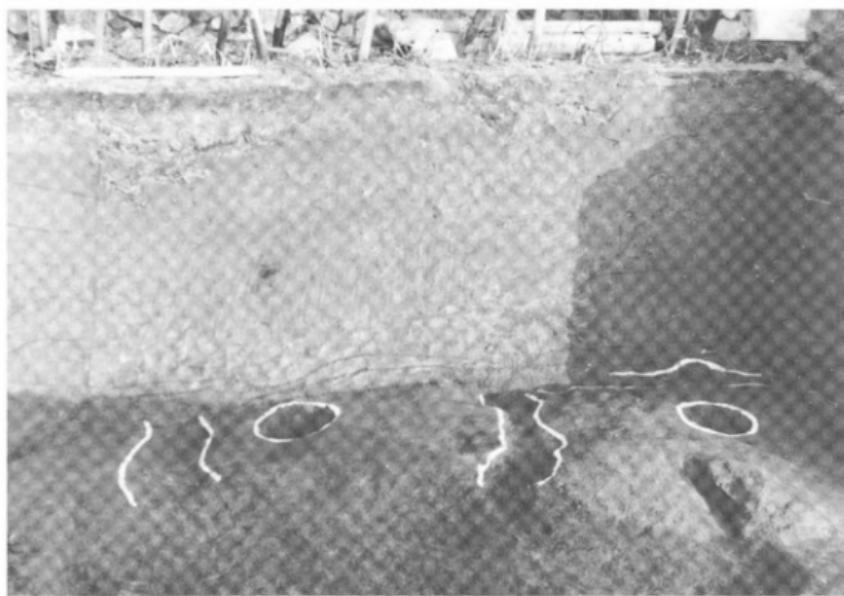
G区6層土師器の出土状態（西から）



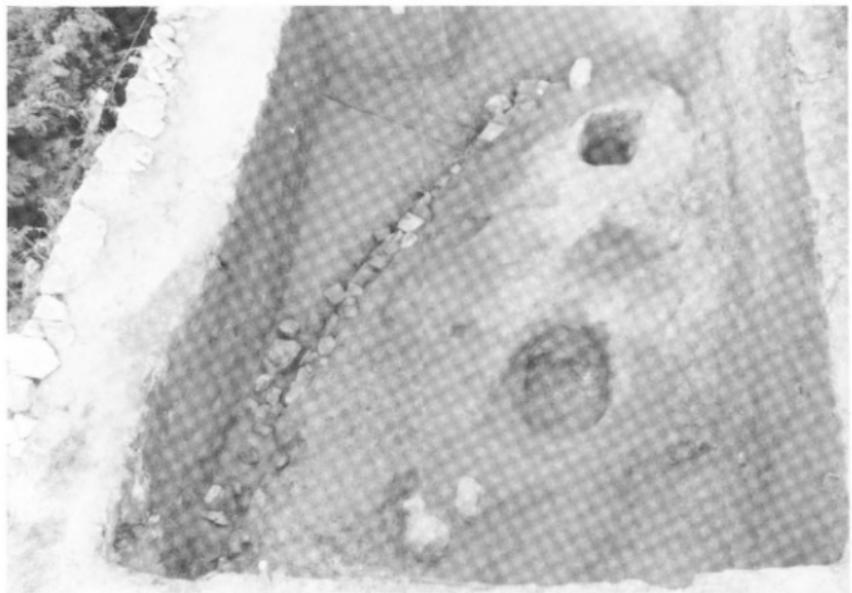
G区10層刀子、土師小皿片の出土状態（東から）



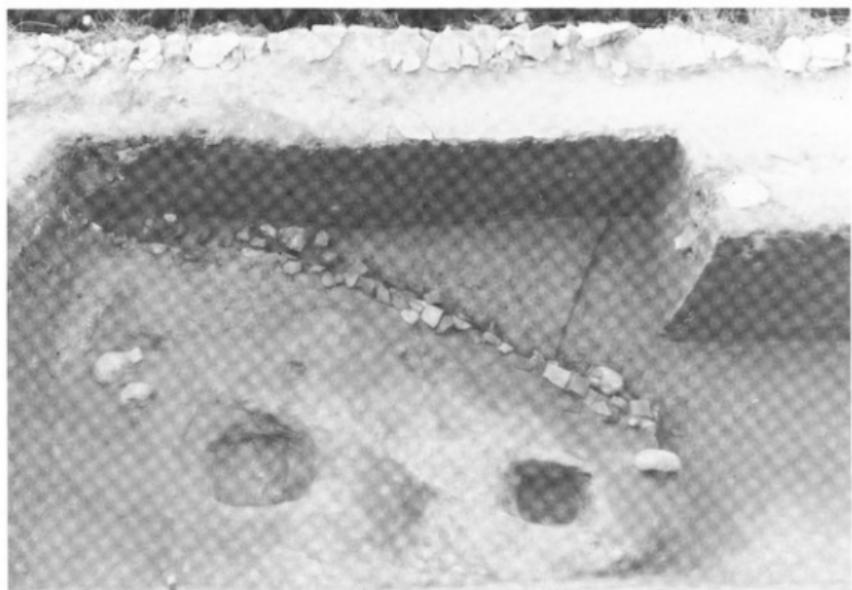
G区東側の拡張（西から）



G区地山面第1段の遺構（西から）



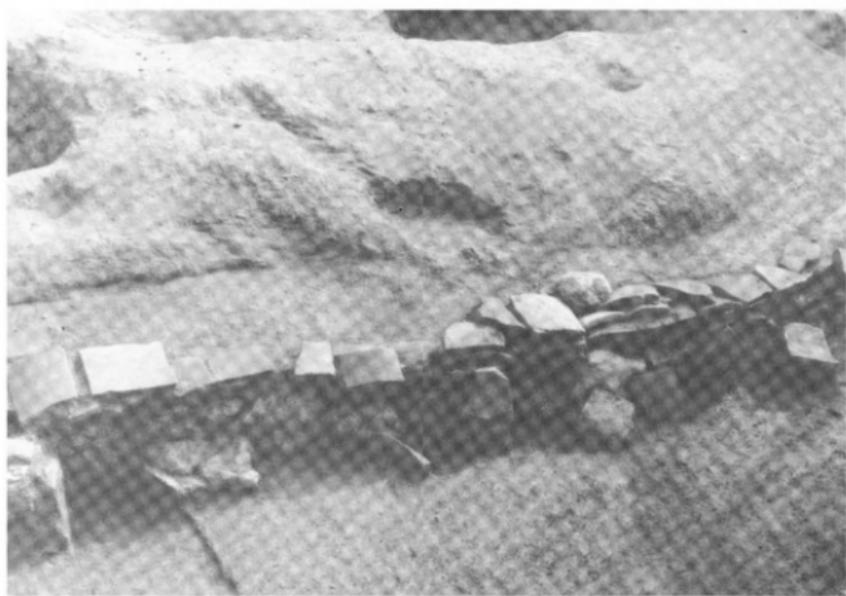
瓦積遺構の検出状況（南から）



瓦積遺構の検出状況（東から）



瓦積遺構の検出状況（北から）



瓦積遺構の検出状況（西から）



瓦積遺構（南から）



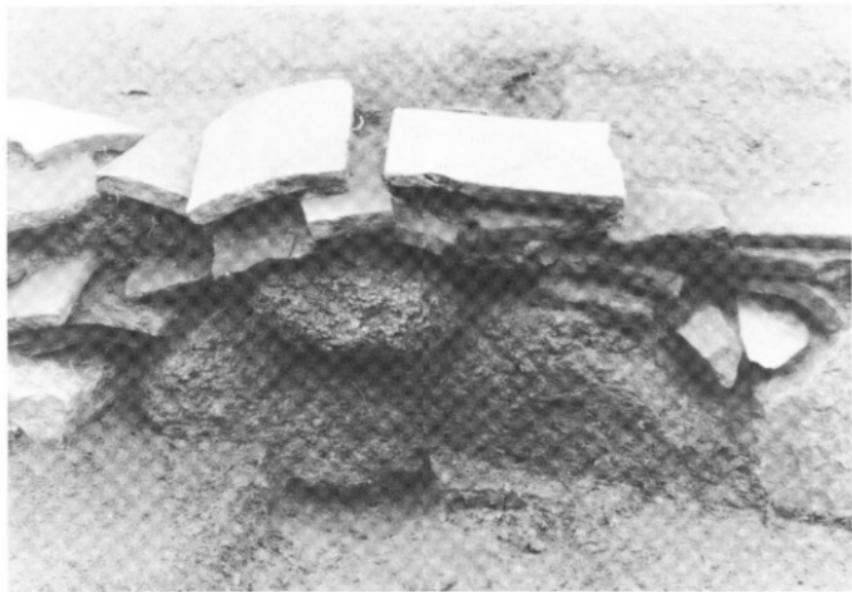
瓦積遺構（北から）



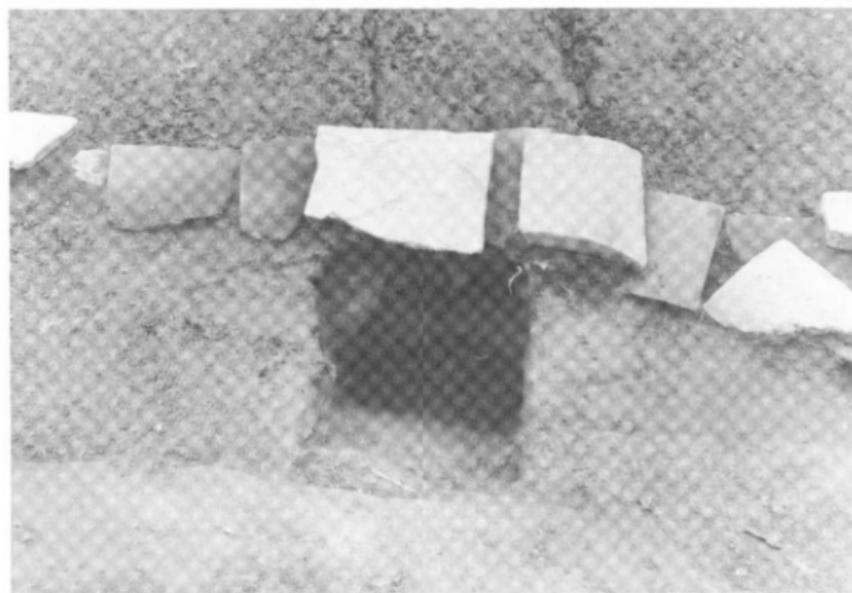
瓦積遺構（西北から）



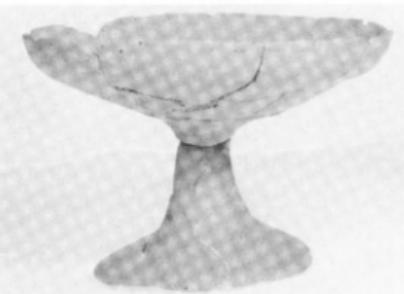
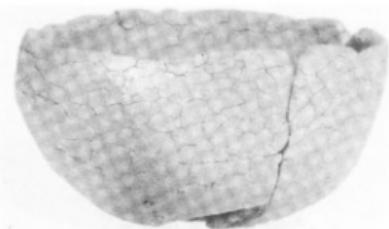
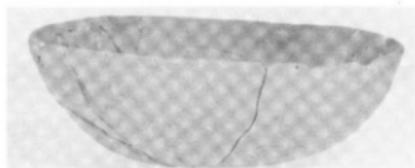
瓦積遺構（北から）



瓦積造構 瓦と地覆石



瓦積造構裏込め



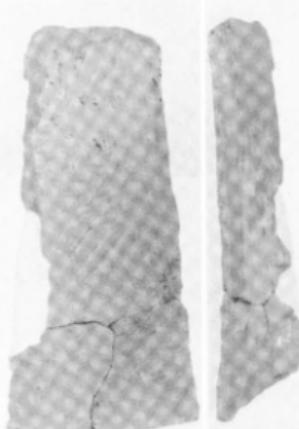
G区 6層出土の土師器



G区 6層出土の土師器



平瓦V類



平瓦VI類

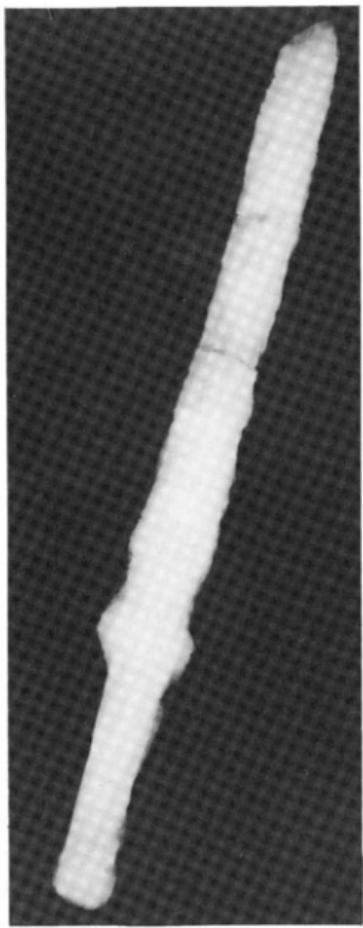


削り込みのある平瓦



鉄釘

鉄滓



G区10層出土の鉄製刀子

大 県 南 遺 跡
—市道大県6号線建設に伴う—
柏原市文化財概報1983—IV

編集・発行 柏原市教育委員会
〒532 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話 (0729) 72-1501 内716
発行年月日 昭和59年4月
印 刷 東洋紙業高速印刷株式会社

